



たいしも通信

シリーズ第18回目となる今回は下関基地隊(以下「下基」)がらみ、ということ、「日本特別掃海隊」についてです。バックボーンである下関海軍防衛隊については、過去の拙稿「たいしも通信」第36号にて触れておりますので、山口県隊友会のHPからバックナンバーをご覧頂けたらと存じます。

◆そもそも機雷掃海とは

機雷は設置方式と作動方式の違いで大きく分類されます。設置方式には、海面に浮いている浮遊機雷、海底のオモリからワイヤーで海面付近まで浮かべる係維機雷、海底に沈める沈底機雷等があります。

作動方式には、接触により爆発する触発機雷、遠隔操作で爆発させる管制機雷、船舶が近づいただけで爆発する感応機雷があります。近づいた事を知る方法として、音響機雷(スクリーやエンジン音を感知して直上に来たら爆発)、水圧機雷(船が航行したリスクリーを回すと水圧が僅かに変化することを検知して爆発)、磁気機雷(磁気の僅かな乱れを検知する方法で、船舶の大半が金属製であり、地球上の船舶は全て地磁気の影響で僅かな磁気を帯びている)等があり、機雷にはこのように様々な種類があることに加え、自身がターゲットとなる危険もことから、機雷掃海とは非常に危険で、同時に高い技術が要求されます。

◆戦時中から続く機雷掃海

太平洋戦争と終戦後の掃海については、下基資料館「えびら」及び同HPから資料を一部抜粋させていただきます。

太平洋戦争末期、米軍は「対日飢餓作戦」として日本の海上交通を遮断すべく主要港湾や海峡に約11,000発に及ぶ機雷をB-29から投下。特に関門海峡にはその半分近い数の機雷が投下されました。

終戦後も祖国復興のため、旧海軍の掃海艇が戦時中と変わらず毎日関門海峡に出撃し、地道に掃海作業を継続していました。

◆「日本特別掃海隊」の朝鮮半島派遣

昭和25(1950)年6月朝鮮戦争勃発。北朝鮮軍は当初優勢でしたが、9月の国連軍仁川上陸を転機に後退を開始、国連軍は陸路及び各地で上陸作戦により追撃しました。北朝鮮軍は主要地域の沿岸に機雷を敷設したため、これを除去する必要が生じましたが、米海軍の対機雷戦部隊は戦時中に比べ縮小され、自隊のみで対応不可能であったため、GHQは日本周辺の航路啓開を実施していた保安庁掃海部隊の朝鮮海域への派遣を命令、これにより特別掃海隊が編制されることとなりました。以下略年表を示します。

- 昭和25(1950)年10月8日 第1陣が下関出港
- 同年10月10日 朝鮮半島東岸の元山港沖で掃海作業開始
- 同年10月12日 米掃海艇2隻が触雷沈没
- 同年10月17日 日本掃海船「MS14号」触雷沈没(1名殉職)
- 同年12月6日 任務完了、帰国

◆朝鮮戦後の日本

昭和26(1951)年9月8日サンフランシスコ講和条約が締結されましたが、特別掃海隊の活躍が良い影響を与えたことは言うまでもありません。とはいえ、略年表にもあるとおり、多大な犠牲があったことも決して忘れてはなりません。実際、17日の触雷により18名の重軽傷者と1名の「行方不明者」が発生しているのです。

▼▼編集後記▲▲▲

戦後すぐの掃海任務はGHQにより、近年の掃海任務は国内の一部の人達から、それぞれ隠されているようで残念です。我々は先達にきちんと感謝の念を持たねばなりませんね。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。